

学校法人燿光学園理事長、栃木幼稚園園長 松下明世先生の半生と「童心拝育」の保育の実践

はや かわ ふ み こ
早 川 富美子

(本 学 教 授)

お がわ す み え
小 川 澄 江

(本学名誉教授)

はじめに

1. 松下明世の人間形成・幼稚園教育実践の基盤

(1) 生い立ち

- 1) 出生から第二次世界大戦終了まで
- 2) 戦後栃木市へ

(2) 松下明世の童心拝育保育実践の基盤

- 1) 父松下吉衛の娘松下明世に対する思い、父の願い
- 2) 松下吉衛とアルウィン学園玉成高等保育学校学園長ソフィア・アラベラ・アルウィン
 - ①ソフィア・アラベラ・アルウィン (Sophia Arabella Irwin 1883 ~ 1957) とは
 - ②父松下吉衛とソフィア・アラベラ・アルウィンとの関係
- 3) 松下明世、ソフィア・アラベラ・アルウィンから「保育の原点」を学ぶ

2. 松下明世における「童心拝育」の保育一どのように理念を受け継いでいるか

- (1) 「童心拝育」の保育理念とは—松下幼稚園園長松下吉衛の保育理念
- (2) 松下明世における「童心拝育」の保育理念と保育目標「創造性と調和性」
- (3) 松下明世における「童心拝育」の保育理念の神髄—「師心」

3. 松下明世の幼稚園経営・保育実践—「童心拝育」「創造性と調和性」の保育理念・保育目標の実践の具象 おわりに

はじめに

國學院大學栃木短期大學人間教育学科子ども教育フィールドではその前身である昭和 43 (1968) 年 4 月の初等教育科開設以来体験型カリキュラムを重視し、その 1 つとして入学間もない 1 年生を対象に「学校観察 (小学校観察・幼稚園観察)」と「宿泊研修」を内容とする 2 泊 3 日の「夏期教育研修」を実施してきた。新入生は引率教員と共にグループワークの形式で幼稚園・小学校の教育現場に赴いて終日、更に半日そこで営まれている幼稚園教育・

小学校教育の実際を観察させて頂いて幼児・児童の活動の様子や現場の先生方の言動から小学校教育・幼稚園教育の実際を学び、各自が学んだ内容を小グループで協議して更に深めグループごとに全員の前で発表して、その記録を小冊子『夏期教育研修の記録』として残してきた。

学校法人燿光学園栃木幼稚園は「童心拝育」を保育理念に掲げて大正期、昭和期、平成期そして令和の今日まで栃木市における教育・保育を担っている私立幼稚園（平成30（2018）年4月より認定こども園）である。「童心拝育」とは、松下吉衛先生が松下幼稚園を創始するにあたってルソー、ペスタロッチ、フレーベル、モンテッソーリなどの基本的文献を読破し、また東京女子高等師範学校附属幼稚園の倉橋惣三や有名幼稚園の園長を歴訪して幼稚園教育の理論と方法を学ぶ中で閃いた造語で、吉衛先生の幼稚園教育思想の根幹をなす理念である。それは端的に言えば「子どもから学ぶ」保育、即ち「物事を教えてやるといったような態度」ではなく「寧ろ純一無雑な童心を拝み拝んで、そこからヒントを受けて育み方を教えてもらうという、世間のあり方とは正反対な態度」（松下吉衛著『父母の書』）を意味している。

私立栃木幼稚園の保育の様子や前理事長・園長松下吉衛先生そして現理事長の松下明世先生の貴重な言葉も「学校観察（幼稚園観察）」に赴いた際の「講話」の記録として『夏期教育研修の記録』の中に残されている。松下吉衛先生は大正2（1913）年に私立松下幼稚園（昭和2年園名変更栃木幼稚園）を、昭和2（1927）年に私立若葉幼稚園を創設している。両幼稚園の保育理念、目標は同じであるが立地が異なっている。「学校観察（幼稚園観察）」は毎年どちらかの幼稚園で実施させて頂いた。また両園には教育実習園として毎年学生がお世話になっている。令和5（2023）年7月には本学人間教育学科子ども教育フィールドの行事、外部講師による「教育講演会」の講師を松下明世先生にお願いして「子どもから学ぶ」の演題で講演頂き、教育愛に満ちた話の内容としなやかな先生の姿に学生、教員共々感動した。

松下明世先生は松下吉衛先生の次女で大正14（1925）年12月5日栃木町に生まれ、青少年期を東京で過ごされている。戦時中は疎開のために東京から宮崎、広島に移り昭和20（1945）年8月15日に発せられた終戦の詔書（玉音放送）は広島市の近郊で聞かれている。戦後栃木市に戻り、父松下吉衛先生と共に栃木幼稚園・若葉幼稚園の保育を担い、昭和62（1987）年5月、父松下吉衛先生の死去後は学校法人燿光学園の理事長、栃木幼稚園・若葉幼稚園の園長として、70年以上栃木県・栃木市の幼児教育界に貢献されている。平成26（2014）年1月には安倍晋三内閣総理大臣より教育功労者として瑞寶雙光章を受章されている。『夏期教育研修の記録』の中に残されている言葉や栃木幼稚園・若葉幼稚園に何うたび

にお聞きする松下明世先生の園児たちに関する数々のエピソードや令和5（2023）年の子ども教育フィールドにおける講演「子どもから学ぶ」の内容は、幼少期の体験や父初代園長松下吉衛先生の言動からの直接・間接の学び、そして私立玉成高等保育学校で履修した教育課程、特に校長ソフィア・アラベラ・アルウィンから受けた教育を土台にして長年幼稚園の現場で実践し研究された成果として発せられたものである。松下明世先生の波瀾に富んだ半生のエピソードや教育・保育に関する名言そして実践の具象は今日幼稚園・保育所・認定こども園の教育・保育に携わっている全ての現役の教職員、そして将来幼児教育や保育・児童教育に関わる学生たちにも、幼稚園教育とは何か、幼児とはどのような存在なのか、幼児にどのように接したらよいかなどについて大きな示唆を与えてくれる。本稿は『夏期教育研修の記録』の中に残されている松下明世先生の言葉や対面にて直接お聞きすることができた数々のエピソードを手掛かりにして松下明世先生の幼い子どもたちとの向き合い方や幼稚園教育の神髄について考察するものである。具体的にはまず大正末年からほぼ一世紀を生き抜く先生の人間形成の過程そして幼児教育観や保育実践の基盤となっている学びについて考察する。第二に、父松下吉衛先生の提唱した「童心拝育」の保育理念をどのように理解し継承しているのか、松下明世先生自身の「童心拝育」の保育理念と保育目標「創造と調和」（げんきでなかよし）の問題、第三に「童心拝育」の保育理念及びの保育目標「創造と調和」はどのような形で具体化されているのか、幼稚園教育の実践の具象として栃木幼稚園の園舎の構造と若葉幼稚園の「誕生会ノート」について考察を試みる。

なお学校法人燿光学園栃木幼稚園・若葉幼稚園は平成30（2018）年4月より幼保連携型認定こども園として今日就学前の乳児・幼児の教育・保育並びに保護者への子育て支援を行っている。松下明世先生は現在（令和6年・2024年11月）学校法人燿光学園理事長、幼保連携型認定こども園栃木幼稚園園長の要職にある。本稿の執筆・内容に関しては松下明世先生の許可を得ている。

1 松下明世の人間形成・幼稚園教育実践の基盤

松下明世先生は大正14（1925）年12月5日に栃木町で生まれている。本章では先生の生い立ちと幼稚園教育観の確立や実践の基盤となっていると思われる幼少期から幼稚園教育に携わるまでの先生の学びと受けた教育について考察を試みる。（以下敬称は省略する。）

（1）生い立ち

まず生い立ちから見てみよう。

1) 出生から第二次世界大戦終了まで

父松下吉衛、母松下トミの次女として、大正 14 (1925) 年 12 月 5 日栃木町で生まれる。

(※栃木市市制施行昭和 12 年 (1937) 4 月 1 日)

昭和 7 (1931) 年 4 月、満 6 歳、栃木第二尋常高等小学校入学

小学校 2 年生まで在籍し、母トミが昭和 9 (1934) 年 1 月に死去、父の仕事の関係で東京市世田谷区梅が丘に転居する。昭和 10 年、吉衛は、先輩宮地貫道による南洋セレベス島での綿花栽培事業に関連し、宮地から日本人労働者と現地人の間に生まれた子どもの教育を依頼され 7 人の子どもたちを連れてきた。同じ屋敷の中に敬光学寮を設立し継母まつ代が 7 人の子どもたちを受け入れて世話をした。明世も一時は、その子どもたちと一緒に食事をし小学校に通った。言葉はわからなかったが、現地の歌を教えてもらったりした。

父吉衛が、連合会の役員をやっていた時に、舞踊家で日本の創作舞踊の先覚者である石井漠 (明治 19 (1886) 年～昭和 37 (1962) 年) にも惚れ込み、明世に「どうしても通いなさい」ということで、東京に転居してから自由が丘の石井漠舞踊研究所 (昭和 3 年創設) まで通って習うことになった。

バレエは幼稚園の年長ぐらいからなんとなくやっていたが、石井漠の研究所で学んだ。基礎をやってからでないと、いろいろなことを発表させてもらえなかったが、石井漠は自分の考えを押し付けるといようなことはなく、引き出すということが素晴らしかった。「何でそういうふうにつくるのですか」と聞くと、例えば、かえるにしても、かえるをじっと眺めていると、それは浮かんでくるんだという。困ったときには一日でも実物を見ている、そうすると動作が出てくる。

ある日、日比谷公会堂の広い舞台上、「かたつむりと雨」という演目を踊った。たった 1 人で、かたつむりのような渦巻が書いてある紙の傘を持ち、頭にツノのように鉢巻をして踊った。1 人で踊ったのは楽しかった。そこで学んだことは、例えば、かたつむりでもかえるでも、実物を見ていると動作になってくる。自分がそのものになれるような感じがしてくる。それは自分なりにおもしろいなと思ってくる。やはり、足の出し方とか、手を上げるときとか、体や顔の向きなどは、そこでの訓練というか、基本のレッスンで学んで身についたのかもしれない。リトミックは、石井漠のところでも習っていた。だから、現在幼稚園に勤務していて (それが活かせて) 有難いなあとと思っている。

例えば、大きな舞台での経験があるので、大きな庭、学校の校庭などを借用して、お遊戯や、踊りなどをやる時も、この広さでは、どういうふうなやり方がいいかその方法

が浮かんでくる。

大ホールでの発表の時などは、ここは幼稚園と違ってお客様が見えるところで遊ぶところではないことを指導する。事前に子どもたちをホールに連れていき、舞台から客席を見渡して「お客さまが座る椅子」と教えたり、「きょろきょろしないで、いつでも同じところを見るのよ」、幕の上がり方、天井の光の具合も全部教える。「ここに来たらお客様がいらっしゃるから幕が上がったら手を振られてもお目めはそっちに向けなくて」とか、トイレの位置を確認したり、ひな段に乗るなどの経験をさせたりしている。先日も栃木文化会館で、お子さんたちが、山本有三の「心に太陽をもて」の合唱をした時にも、事前に経験をさせている。来場した方々が、とてもびっくりしていたが、それをやらないとかわいそうなんです。慌てたりどうしたらいいかわからなくて、「先生、トイレはどこ」ということになってしまいます。だから、はじめが大切なんです。来場者に、「よく頑張ったね」と言われるけれども、それをやらないとだめなんです。

このように、これまでの明世の舞台経験は、幼稚園でも子どもたちの指導にも活かされている。

昭和 13（1938）年、満 12 歳、東京市世田谷区 荏原尋常高等小学校卒業

（※ 1871 年廃藩置県により東京府設置、1887 年東京市 15 区設置、1943 年東京都制法により府の区域は都となり、東京市は消滅、1947 年 23 区及び市、郡部となった。（広辞苑）

昭和 13（1938）年 12 歳、立教高等女学校入学

父は、明世と三女の健康面を心配し、静かな環境や教育環境の整った三鷹台にある立教高等女学校に入学させた。世田谷の松陰神社の近くに自宅があり、女学校は自宅から通学していた。学校では、一人ひとりの机や椅子の高さなどにも配慮され、授業内容が多角的で素晴らしかった。英語の授業は、鏡を見ながら先生の発音の仕方を真似するように指導されたりして、厳しい授業だったがとても楽しかった。更に、毎週礼拝があり、クワイヤー（合唱隊）やパイプオルガンの先生もきれいに弾かれていた。聖句などの指導も受けた。そのような指導を父吉衛は望んでいた。

明世は高等女学校で 5 年間過ごす。教師は外国人が多かった。「アナタチハ、リッキョウスズメ」などとあだ名をつけられた。

しかし、日本の戦争の状況から、女学校 3 年生の時に、全校生徒が校庭に集合させられた。そこで校長先生、教会のオルガニスト、英語、体操の先生などアメリカ人やイギリス人の 5 人の先生が、「国に帰ります」と言われ、お別れ会をした。外国人の先生は、全員帰国せざるを得なくなり帰国した。今でもその時のことは心が痛むと明世は回想する。

昭和 18 (1943) 年 3 月 18 歳、立教高等女学校卒業

4 月 日本女子大学校入学

日本女子大学校に入学したが、日本の状況が刻々と悪化し、学校工場として機械が運ばれてきたり、それが不可能になると明電舎などに派遣され、授業どころではなかった。当時、衣服の先生が考案した上下が続いているモンペを着用し、その上衣には、学校名、住所、名前、血液型が明記された名札が縫い付けられていた。

昭和 18 (1943) 年 10 月 21 日学徒出陣、明治神宮外苑競技場での出陣学徒壮行会に学友と参加

戦場に赴く学徒を思い喪失感を味わった。(出陣学徒壮行会に 2 回参加)

昭和 19 (1944) 年 19 歳、日本女子大学校中途退学 (太平洋戦争による疎開のため)

学校を辞める頃は、授業は無く、学生はチリチリバラバラになっていた。

当時の日本女子大学校第四代校長井上秀より、「いろいろなところに派遣されるけれども、学校は離れても学校の教えは持ち続けるように」と訓示を受けた。

父の後を追って宮崎へ疎開した。食料は豊富であったが、艦砲射撃にあい、すぐに継母の実家があった広島県賀茂郡乃美尾村 (後の黒瀬町、現・東広島市) へ疎開する。

昭和 19 (1944) 年 19 歳、広島県賀茂郡乃美尾村 (後の黒瀬町、現・東広島市) の賀茂海軍衛生学校入職 (庶務)

海軍衛生兵を教育する海軍衛生学校庶務に就職し毎日モンペ姿で通勤していた。

昭和 20 (1945) 年 8 月 6 日 広島市原爆投下、賀茂海軍衛生学校に被爆者押しよせる

8 月 15 日 戦争終結の詔書発表 (玉音放送) は、広島で聞く

畑にいた明世は、スイッチは入ってはいても、何を言っているのか最後の御言葉はよく聴こえなかった。ただじっと聴いているだけであったが、次第に終戦の報道が明らかになってきた。

2) 戦後栃木市へ

昭和 20 (1945) 年 20 歳、終戦後栃木市に戻る

昭和 23 (1948) 年 23 歳、栃木幼稚園入職

姉と共にお茶の水女子大学附属幼稚園や足利幼稚園等近隣の幼稚園を訪問して保育を学び、実践する。姉は暫くして嫁ぎ先の東京に戻る

昭和 30 (1955) 年 30 歳、アルウィン学園玉成高等保育学校卒業 (39 期生)

栃木幼稚園入職

昭和 31（1956）年 4 月 副園長松下まつ代昭和 30（1955）年 11 月 18 日死去により栃木幼稚園・若葉幼稚園副園長に就任

昭和 49（1974）年 6 月 3 日 幼稚園教諭一級普通免許状取得

昭和 62（1988）年 62 歳、5 月 16 日理事長・園長松下吉衛の死去（享年 99 歳）により学校法人燿光学園理事長、栃木幼稚園・若葉幼稚園園長に就任（昭和 52 年、学校法人燿光学園認可）

平成 5（1993）年 68 歳、教育功労者として知事賞を受賞

平成 26（2014）年 89 歳、安倍晋三内閣総理大臣より教育功労者として瑞寶雙光章を受章

平成 30（2018）年 93 歳、幼保連携型認定こども園学校法人燿光学園理事長、栃木幼稚園園長に就任

令和 5（2023）年 7 月 19 日、國學院大學栃木短期大学人間教育学科子ども教育フィールド教育講演会講師、演題「子どもから学ぶ」講演

令和 6（2024）年 3 月、栃木幼稚園 111 回、若葉幼稚園 97 回進学式举行

令和 6（2024）年 12 月 5 日満 99 歳、尊敬する父の遺志を継いで燿光学園理事長として乳幼児の保育・教育と保護者の子育て支援に当たっている

（以上令和 6（2024）年 8 月 7 日・9 月 13 日聞き書き及び学校法人燿光学園配付資料参照）

（2）松下明世の童心拝育保育実践の基盤

松下明世が幼稚園教育に携わることを決意したのは父松下吉衛（明治 22 年～昭和 62 年・1889～1987）の言葉であり、その決意を堅固なものにしたのがアルウィン学園玉成高等保育学校長ソフィア・アラベラ・アルウィン（Sophia Arabella Irwin 明治 16 年～昭和 32 年・1883～1957）から受けた教育である。本節では父の娘への期待、父とアルウィンとの関係、アルウィンから受けた教育に焦点を当てて考察する。

1）父松下吉衛の娘松下明世に対する思い、父の願い

松下明世の父に関する文面や口上から、幼い頃から父を尊敬しその願いに応えるために努力してきた姿勢が窺われる。父松下吉衛は明治 22（1889）年栃木町の生まれ、読書家で好奇心が強く、凝り性であった。20 歳の頃にアメリカに留学し、帰国後早稲田大学政経学部に入學して大正 2（1913）年に卒業している。同年、栃木町のために私立松下幼稚園を設立し、昭和 2（1927）年には若葉幼稚園を開設してその教育、経営に尽力しているが、自らの子どもたちの健康と教育のためにも奔走している。

松下吉衛は昭和 54 (1979) 年 2 月 8 日付の『清流』に「きょうこのごろ」と題して、子どもたちについて次のように述べている。

「七人の子供ですが、長男次男が医師、長女次女三女が教師（次女が私と共に園に働いている）四女が女医、五女が会社員としてそれぞれ働いています。」

ここに記されている吉衛と「共に園に働いている」のが「次女」の明世である。この時吉衛は 90 歳、明世は 53 歳であった。

幼い頃の明世は病弱であったため、父は健康により環境を求めて娘の進学先を選び、現代舞踊の発展に尽力した石井漠の研究所にも通わせてくれたという。

次女の明世が幼稚園教育に携わることになった契機については、平成 8 (1996) 年 6 月『夏期教育研修の記録』第 29 集所収の栃木幼稚園園長松下明世の講話記録「保育の心と祈り」（テープ起こし：桑原眞理子）が大きな示唆を与えてくれる。学生の「先生は、どうして幼稚園の先生になったのですか。」の問いに対して、明世は次のように答えている。

「当時は、私の父が園長でした。丁度、私があなた方くらいの年齢だったでしょうか。『幼稚園をやってみる気はないか』と聞かれたのです。私はさんざん考えた末に、いくら小さい子どもとは言え、人を教えるなんてとんでもない、私には、とてもとても出来ないと思い、そのことを、父に申しました。

ところが、父は開口一番、『人を教えるという気持ちの問題だ。人が人を教えるということとは真剣に考えれば考えるほど、絶対にできないことで、人を教えられるのは、聖人君子であり、高邁な人格の持ち主こそ、はじめて教える立場に立てる人だと思う。この世の中に、そのような人格者は、滅多に存在しないと思う。お前が、人を教えると考えているその気持ちが、言ってみれば傲慢で驕りの心といってもよいくらいだ。教えるという考え方ではなくて、『子どもから学ぶ』『子どもから教わる』と気持ちをおきかえてみてはどうか』と言われました。

そういわれても、私は若く未熟でしたから、『子どもから学ぶ』ということが、なかなか理解できなかったのです。そこで再度考えました。

父は、『童心拝育』を根本理念とし、子どものもって生まれた純乎として純なる本具を確認し、祈りの心をもって育てる、また宇宙の意志の二大特性－創造性（げんき）と調和性（なかよし）に基づく、というこの幼稚園の教育理念・教育目標を、いろいろな例を出しながら、話してくれました。それを聞きまして、子どもはひとりひとり人格をもっている。神仏を礼拝する時のように、謙虚な心をもって子どもに接すればよいのではないか、と考え方が

変わってきました。教育する心は、祈りにはじまるという考えに至り、幼稚園をやってみようと心にきめたのです。」

明世は立教高等女学校から日本女子大学校に進学するも戦争が激化し止む無く中途退学する。父に従って宮崎ついで広島県乃美尾村に疎開し、賀茂海軍衛生学校の庶務の職に就くがすぐに終戦を迎えた。長兄、次兄は医師の道に進み、7歳年上の姉は既に嫁ぎ、4歳下の妹は在学中であった。栃木に戻った明世の進路は定まっていなかった。戦争のために閉鎖されていた栃木幼稚園は戦後昭和21（1946）年9月には保育を再開し、若葉幼稚園は昭和25（1950）年から保育を開始した。明世が「幼稚園をやってみる気はないか」と父に問われたのは、「丁度、私があなた方くらいの年齢だったでしょうか。」と述べているので、20歳の頃、連合国軍総司令部の占領政策によって価値観が大きく転換し国家機構も教育制度も混乱していた時代、戦後の新幼稚園教育制度がスタートする昭和22（1947）年前後のことであろう。広島の海軍衛生学校で多くの被爆者を目撃し衝撃を受けて栃木に戻り、学業に復帰できなかった次女明世を父は不憫に思い幼稚園教育界に誘ったのであろうか。

「幼稚園をやってみる気はないか」と聞かれた明世は、「さんざん考えた末に、いくら小さい子どもとは言え、人を教えるなんてとんでもない、私には、とてもとても出来ない」と答えている。すると父は「教えるという考え方ではなくて、『子どもから学ぶ』『子どもから教わる』と気持ちをおきかえてみてはどうか」と教示したのである。しかし若くて未熟であった明世は「子どもから学ぶ」「子どもから教わる」ということの意味を中々理解できなかった。そこで父は「童心拝育」及び「宇宙の意志の二大特性－創造性（げんき）と調和性（なかよし）」に基づく教育目標を、いろいろな例を出しながら、話してくれたという。

父の「子どもから学ぶ」「子どもから教わる」という言葉の意味を、明世は「子どもはひとりひとり人格をもっている。神仏を礼拝する時のように、謙虚な心をもって子どもに接すればよいのではないか、」「教育する心は、祈りにはじまる」と悟り、明世は「幼稚園をやってみよう」と保育者の道に進むことを決意したのである。

昭和23（1948）年明世は栃木幼稚園で働き始めた。東京の嫁ぎ先から実家に疎開していた姉と2人で足利幼稚園やお茶の水女子大学附属幼稚園など、近隣の幼稚園を歴訪して保育方法を学び、栃木幼稚園の園児の前に立った。明世によると、姉はピアノが得意で明世の言葉に合わせてピアノを弾き2人で子どもたちの心をつかんだが、姉は間もなく嫁ぎ先の東京に戻ったという。父であり園長である吉衛は「保育については大変厳しかった」。明世は次のように回想している。

「家では、父親ですが幼稚園では園長で保育については大変厳しかったのを覚えています。絵本を読んで聞かせたり、お話をしたり、紙芝居を読んだりしている時、傍らでじっと聞いていて、お子さんが帰ったあと、『子どもたちは、あのような読み方でわかったろうか。子どもたちが納得して楽しめるやり方だったろうか。いつも子どもたちの側に立って考えられたろうか。その時間が15分だったら、その15分間は、子どもたちにとって有意義でなければならない。上っすべりの安易な与え方でなく、絵本・紙芝居の作者が、何を訴え子どもたちに何を伝えたいのかという内容を理解して与えなければ、無意味な心ない保育になってしまう』というのです。読み方ややり方に心をこめなさいといわれ、反省し、工夫し、努力した大変さを今でも覚えています。

父は、読書家でした。いつ如何なる時も、といってもよい程、いつも本を手にし5分間でも隙があれば、読んでいました。

保育が終わった時間に、保育関係誌に限らず、関心をもった本があると、教員全員で読みまわしをし、その内容について話し合いの時間がもたれました。父園長の気持ちは、直接、間接に保育する心を育てたいとの願いだったと思われます。」(平成8年6月『夏期教育研修の記録』第29集「保育の心と祈り」34～35頁)

父松下吉衛は、基本的な幼児教育に関する文献を読み、倉橋惣三などの進歩的な幼稚園教育の実際にも触れて幼児中心の童心保育の理念を確立していた。「いつも子どもたちの側に立って考えられたろうか」、その時間は「子どもたちにとって有意義でなければならない」、「読み方ややり方に心をこめなさい」と子どもの側に立つよう指導している。父吉衛は傲慢に「教える」教育ではなく謙虚な心で「子どもの本具」を見極めて育成する「童心保育」の教育の本質を悟らせるために厳しく指導したものであると思われる。父の厳しい指導に対して、明世は「反省し、工夫し、努力した大変さを今でも覚えています。」と回想し、「父の気持ちは、直接、間接に保育する心を育てたいとの願いだったと思われます。」と父の思い、父の願いを察し、その期待に応えるために努力をしたのである。

父の意図を察して「反省し工夫し努力し」ている娘を見て、父は明世に専門教育を受けることを勧めた。こうして明世は、父の勧めで昭和29(1954)年4月アルウィン学園玉成高等保育学校に入学することになったのである。

2) 松下吉衛とアルウィン学園玉成高等保育学校学園長ソフィア・アラベラ・アルウィン
父吉衛は娘を保育者にするためにアルウィン学園玉成高等保育学校学園長ソフィア・ア

ラベラ・アルウィンに託すのである。ソフィア・アラベラ・アルウィンはどのような人物なのであろうか。

- ① ソフィア・アラベラ・アルウィン (Sophia Arabella Irwin 明治 38 年～昭和 32 年・1883～1957) とは

ソフィア・アラベラ・アルウィンは、父ロバート・ウォーカー・アルウィン（初代駐日ハワイ公使）、母いきの第一子（長女）として東京で誕生した。アルウィンの父は、アメリカ合衆国の建国の父として讃えられ 100 ドル紙幣にも描かれているベンジャミン・フランクリンの後裔である。アルウィンは 13 歳の時に父に連れられて渡米し、父方の祖母宅に滞在し教育を受けた。そして、最良の教育を受けるべく、全寮制の「女子寄宿学校（日本の高等学校）」に入学している。卒業までの 5 年間、優秀な成績を修め、更に、ピアノ、社交ダンス、舞踊、水泳、テニス、自転車乗りなどもマスターした。祖母との生活や留学経験そしてキリスト教への篤い信仰心を基盤にしながら成長していった。19 歳で日本に帰国後は、母の勧めで日本文化を学んでいる。小笠原流の作法、茶の湯、華道、箏曲、書道、日本画、日本史、日本文学、日本美術史等も家庭教師から学び、日本の文化や伝統など、高度な知識や技術を身につけている。

明治 38（1905）年 23 歳の時、幼児教育の理論と実際の理想を求めて再度渡米し 7 年間過ごし、明治 45（1912）年コロンビア師範大学卒業を機に帰国している。帰国後日本各地の幼稚園、保姆養成所を視察するが飽き足らず、大正 2（1913）年ドイツに渡りフレーベル学園で恩物などの研鑽を積み、続いて大正 3（1914）年にイタリアでモンテッソーリから 1 年半にわたって教育法を学び帰国している。

その後、大正 5（1916）年 4 月、アルウィンは「良民の教育は最良の教師にあり」と考え、キリスト教的人間愛による温かい目と心をもった保育者を養成するために、私財を投じて私立玉成保姆養成所（1 年制）と玉成幼稚園を設立し、徹底したフレーベルの精神・恩物教育とモンテッソーリ主義教育で保育者養成を行った。昭和 17（1942）年に日本に帰化し、「有院遍良」と改名している。

昭和 22（1947）年 4 月の学校教育法施行により私立玉成保姆養成所はアルウィン学園玉成高等保育学校となる。5 月財団法人アルウィン学園成立、昭和 32（1957）年 2 年制となっている。その後、昭和 52（1977）年玉成保育専門学校と改称される。（学校法人アルウィン学園「法人概要」、日本保育学会『日本幼児保育史』第 3 巻 216・219 頁）

- ② 父松下吉衛とソフィア・アラベラ・アルウィンとの関係

松下吉衛が娘明世をソフィア・アラベラ・アルウィン（以後アルウィンと呼称）に託し

た事由は昭和初期からアルウィンと親交があり、その保育者養成に全幅の信頼を寄せていたからである。園長松下吉衛が、幼稚園を軌道に乗せるために尽力したことは「幼児保育の内容を充実」させること、「良教師を集める」こと、「設備の完全を図る」ことの三点であった。このことは、若葉幼稚園を新設する趣旨を記した昭和2(1927)年6月6日付の「幼稚園について進言」(栃木幼稚園蔵)に次のように記されていることから明らかである。

「下根不才なれば何の思案もならず、たゞ至心に幼児保育の内容を充実するに努めるとゆう外、別の仔細もないのであります。不肖わかくて良教師を集めるに腐心し又設備の完全を図るに意を用いております。」(表音式仮名遣)

園長松下吉衛は幼稚園経営者として保育の内容を充実させるためには「良教師を集める」ことが必須であることを認識していたのである。

「良教師」を求めている松下吉衛は昭和2(1927)年に二葉保育園園長の徳永^{ゆき}恕(1887～1973)の紹介でアルウィンと出会ったのである。昭和55(1980)年に出版されたアルウィンの伝記『荒野に水は湧きてーベラ・アルウィンの生涯ー』⁽¹⁾に次のように記されている。

「松下園長とアルウィン先生との出会いは、二葉保育園々長の故徳永恕先生からの紹介である。震災後西田天香が一燈園で母子ホーム保育園、その他の社会事業に尽くされていた時親しくしておられたと聞く。」(429頁)

松下吉衛は一時求道生活を送り、西田天香が「托鉢・奉仕・懺悔の共同生活を営」むために大正2(1913)年9月14日に京都鹿ヶ谷に開設した一燈園に、大正3(1914)年に一時滞在して修行したことがある⁽²⁾。徳永恕は、貧しい子どもたちのために明治33(1900)年1月10日に野口幽香、森嶋峰によって開園された二葉幼稚園の保姆として明治41(1908)年3月から働き始めた⁽³⁾。二葉幼稚園は大正5(1916)年に二葉保育園に改称されるが、徳永恕は二葉保育園の「大黒柱」として、二葉保育園分園や母子寮を創設するなど恵まれない母子のために尽力し、昭和29(1954)年に名誉都民の称号を与えられている⁽⁴⁾。

大正12(1923)年9月1日、一燈園の西田天香を迎えるために上京した松下吉衛は関東大震災に遭遇し、被災者を救済することになった。その折西田天香から二葉保育園園長徳永恕を紹介されたのであろう。以後親交を深め、保姆免許状を有している「良教師」を探すために徳永恕を訪問し、思いがけず玉成保姆養成所のアルウィンへの紹介状を授かったのである。

松下吉衛は紹介状を持参して玉成保姆養成所を訪問した時の様子についてアルウィンの

伝記『荒野に水は湧きてーベラ・アルウインの生涯ー』（アルウイン学園・1980年）に「アルウイン先生を思う」と題して次のように寄稿している。

「東京四谷旭町のスラムにある二葉保育園に園長徳永恕子女史をお訪ねしてはからずもアルウイン先生へのご紹介状を頂き、杉並の、玉成保姆養成所へあがりましたが、たしか昭和二年の二月頃だったでしょうか。卒業生を二人ほど、私のお世話させてもらっている幼稚園に、働いてもらいたいお願いのためでした。

初対面の時、先生から別段これぞという印象は受けませんでした、外人（後で混血の由承りました）でありながら私たち以上に標準語を正しい語調で話されるのに驚きました。

この申し込みによって、新卒の青木さんと塚谷さんが栃木市の栃木幼稚園に赴任して下さったのですが、青木さんは現在母校で要職に就いていられます。」（『荒野に水は湧きてーベラ・アルウインの生涯ー』481頁）

栃木幼稚園園長の直々の依頼によって玉成保姆養成所の「新卒の青木さんと塚谷さんが栃木市の栃木幼稚園に赴任」する。吉衛は玉成保姆養成所で学び保姆免許状を有している優秀な保姆を採用したことが自慢であったのであろうか、「幼稚園について進言」において次のように記している。

「現在勤務している保姆わ、日本の保姆養成のことに十数年貢献して来た有名なアルキン先生の教に浴したものを中心に組織されており、新幼稚園令による有資格が三名それに助手が三名であります。」（昭和2年6月6日「幼稚園について進言」）

ここに記されている「新幼稚園令」とは、大正15（1926）年4月22日に公布された幼稚園に関する初めての勅令「幼稚園令」のことで、園長・保姆の職務内容のほかにその資格についても規定している。昭和2（1927）年、栃木幼稚園では幼稚園令に基づく保姆免許状を有している保姆が3名、免許状を有していない助手が3名働いていたのである。後のことであるが、昭和2年に採用された青木八代保姆は、松下吉衛が述べているように戦後母校アルウイン学園の講師となり、「フレーベル研究・恩物」の授業を担当している⁽⁵⁾。松下明世も玉成高等保育学校在学中に青木八代先生の授業受けたという。

玉成保姆養成所の卒業生は「良教師」を求めている園長松下吉衛、そして、アルウイン先生の期待に応えて童心拝育の保育理念やフレーベルの幼稚園教育思想をよく理解して、遊びを重視し子どもの自発性や創造性、協調性の育成を目指す保育を実践したに違いない。

アルウィン先生は卒業生の就職先までその様子を見に来ている。園長松下吉衛は感激して「アルウィン先生を思う」に次のように記している。

「このお二人（青木さんと塚谷さん）が栃木へ来られて、しばらくしますと、突然アルウィン先生のご来訪がありました。先生は一〇〇キロ以上の遠路をものともせず、わざわざ自動車を駆って、教え子のようにすをご覧になりにお見えになられたのです。私は幼稚園を経営して数十年になり、遠近そちこちから数多くの保育者たちをお願いしましたが、後にも先にも校長先生のこうした意味のご来訪を頂いたことはありません。アルウィン先生に対して、この方は世の常の教育者でないと、心から敬意を払わずにられませんでした。」（『荒野に水は湧きて－ベラ・アルウィンの生涯－』481頁）

青木保姆と塚谷保姆は昭和2（1927）年に玉成保姆養成所を卒業しているのでアルウィン先生の栃木幼稚園への来訪は昭和初年のことであろう。「アルキン先生の教に浴した」2人の保姆の働きぶりを見て、また教え子の様子を見るために遠路をものともせず来園したアルウィン先生の教育者としての熱意に触れて、園長松下吉衛はアルウィン先生に深い信頼を寄せ、次女明世に玉成高等保育学校への入学を勧めたものと思われる。吉衛は、明世がアルウィン先生から「内容の充実したすぐ実際に役立つ保育学」を学び、更に生き方まで学んだことを次のように「アルウィン先生を思う」に記してアルウィンに深く感謝している。

「終戦後、私の次女が保育学を本格的に勉強することとなり、私は一も二もなく玉成を推薦しました。次女は、こうして、一年間アルウィン先生の教を親しく受けさせて頂いたのですが、内容の充実したすぐ実際に役立つ保育学の授業よりは予期していたことでもあったので、そんなに驚きもしませんでしたけれど、人間としてどう生きたらよいかという生活訓練を、一挙一動にいたるまで実に厳しく正しく行き届いてなさってくださったことは、いくら感謝しても感謝しきれません。次女はそのお陰を被って、どうやら『生活者』たる素養を身に着けられたようです。本人も、このことについては身に沁みて感じているものと見え、未だに折にふれてはアルウィン先生のご恩は一生忘れられないと言っています。」（『荒野に水は湧きて－ベラ・アルウィンの生涯－』481頁）

父吉衛は娘明世に「実際に役立つ保育学の授業」だけでなく「人間としてどう生きたらよいかという生活訓練」を、一つひとつ厳しく正しく行き届いた指導をしてくれたアルウイ

ン先生に「いくら感謝しても感謝しきれません。」とまで述べ、娘も「折にふれてはアルウィン先生のご恩は一生忘れられないと言っています。」と記している通り、吉衛・明世親子のアルウィン先生に対する感謝の念は一通りではない。令和6（2024）年の今日においても松下明世はアルウィン先生の厳しい教えに感謝している。松下明世は父吉衛の理想とする「子どもから学ぶ」良教師になることを決意して昭和29（1954）年4月アルウィン学園玉成高等保育学校に入学し、翌昭和30（1955）年に卒業（39期）している。明世がアルウィン学園で学んだ期間はたった1年である。1年間の学びであったが、アルウィンと出会ったことはこの上ない幸運であり、アルウィンは人間としての生き方の上でも幼稚園経営や保育の実践の上でも明世を支える生涯の師となっている。明世は「私が幼稚園をやっていること、更に思いを深くしたのは、故アールウィン師に出会い保育の原点を学べたことだと実感しています。」（『夏期教育研修の記録』第29集「保育の心と祈り」平成8年6月34頁）と述べているのである。

これまでの父松下吉衛や娘明世の言葉から松下吉衛・明世父子はアルウィン先生を尊敬し深く感謝していることが理解できる。栃木幼稚園の職員室にはソフィア・アラベラ・アルウィンの大きな写真が掲げられている。

3）松下明世、ソフィア・アラベラ・アルウィンから「保育の原点」を学ぶ

松下明世は「故アールウィン師に出会い保育の原点を学」んだことを述べ、父松下吉衛は「実際に役立つ保育学」とともに「『生活者』たる素養を、人間としてどう生きたらよいかという生活訓練を、一挙一動にいたるまで」厳しく正しく指導して下さったとアルウィンに深謝していることは既にふれた。明世が学んだ「保育の原点」とはどのような教育なのであろうか。

松下明世は「アールウィン師」からの学びについて平成8（1996）年6月の栃木幼稚園園長講話「保育の心と祈り」において次のように語っている。

「アールウィン師のお話をしましょう。

私は、先生から子どもに対する愛情のもち方といいましょうか、『愛』を基とした保育学教育学、哲学、保育内容を学びました。

『子どもは、楽しくあそぶことから学ぶ』全く父園長と同じ考えをもっておられました。又、『考えることが、学ぶこと』とも教えていただきました。

愛を基にした保育学は、具体的な例をお話ししますと、否定的な考え方の徹底廃止で、

積極的な見方、考え方の徹底実践でした。^{マイナス}(-) 思考を ^{プラス}(+) 思考に置き換える。これは、話し方、お話づくり、日常の言葉遣い等に、徹底して実践させられたのです。大変むずかしくきびしいことでした。

『雨が毎日々々、降りつづいて困りますね』これは否定的で『お庭の草も木も、雨が降って、うれしいなって葉っぱが光っているでしょう』同じ雨の話でも ^{プラス}(+) 思考に置き換えることで、子どもたちが明るく楽しくなる、というのです。

猛獣のライオンの話にしても、ライオンの親がこどもを育てる時に言うに言われない愛情をテーマにするのです。『赤ちゃんライオンのために、親ライオンは夜になると、おふとんのついたやわらかい足の裏で、音をさせないようにご馳走を見つけてます』と。一つのお話づくりをすると、目を通して、子どもたちに与えてよいかどうか、厳しくチェックされました。

研究心、観察することの大切さを作り話を通して教えてくださったのだと思うのです。

フレーベルの『母と子の遊戯』の講義は、先生の一言一語が、珠玉のように感じ、毎回感動で、水をうったように静かでした。人生いかに生くべきか、心のあり方を学んだのです。」(傍点筆者、平成8年6月『夏期教育研修の記録』第29集「保育の心と祈り」34頁)

アルウィンは大正5(1916)年に玉成保母養成所を創立し、「恩物と手技」「母と子の遊戯」「会集」「細目(カリキュラム)」、モンテッソーリの「感覚教育」などを講義している⁽⁶⁾。

明世は、昭和29(1954)年から30(1955)年にかけて玉成高等保育学校(保母養成所)で学んでいる。当時のアルウィンは71歳、病が進行し視力も衰えていたが、明世たち学生に対する情熱は変わらず、病臥の傍らでも個別指導をしてくれたという。アルウィンは昭和32(1957)年6月に死去しているので明世はアルウィンの晩年の教え子である。松下明世は、アルウィン先生の厳しい教えについて次のように語っている。

(自宅の)病床でも一人ひとりに厳しく徹底的に指導される先生だった。原稿は、わら半紙に4Bの鉛筆で大きく書くように指示され、「明日の朝6時に、私のところに原稿を持っていらっしゃい」と言われた。アルウィン先生は、「明世さんですか、今日書いてきたのをお読みなさい」と言われた。返却されて一生懸命に書き直した原稿を2、3行読むと、「はい、それまで。そこにお捨てなさい」とおっしゃり、数枚ある原稿をビリビリと破きベットのそばにあったくずかごに捨てられた。アルウィン先生は、原稿を読むのをじっとお聞きになり、「あなたの頭をゼロにしてください。今のではなく、最初から始めましょう。それを頭に

残してはいけません。あなたの考えはゼロになりました」と言われた。破られるというのは、「新しい考えを出しなさい」という意味で多方面から深く考えることを厳しく指導された。「ゼロになさい」というのは、「保育の保から、始めなさい。今までのあなたの考えをやめて、始めからやりなさい」ということだと思ったけれども、とにかく厳しかった。

「海」という題を出された時も、翌日4Bの鉛筆で書いてもっていくと、「はい、また明日6時に私の寝室にいらっしゃい」と言われた。「海と言うのはこれだけではないでしょう。違います。それを全部破いて、そこにお捨てなさい」とおっしゃった。「海ということ考えた時に、どういうふうなことを想像しますか、これだけではないでしょう。あなたの発想の展開とか、海と言われたら、ただ、そこにある海だけではない、いろいろなことが含まれています。そこを書いていらっしゃいと言ったのに、わかりませんか」そして、目をつぶって滔々とお述べるになる。それをメモする暇もなくじっと聞いていた。あーあ、そういうものなのか、海に住んでいるものとか、助けあっている生き物とか、いろいろなエピソードがたくさん。それを「貴方の頭の中にお入れなさい」と言われた。

果物があると、「これとこれを、もし他に必要だったら、果物屋さんに行ってきて、このテーブルをデコレーションしましょう」とテーブルの上をいろいろな果物で飾った。それもアルウィン先生の感覚で、「ここは良い、これはダメ」と指導された。

アルウィン先生は、茶道、華道の免許も取得していた。椅子も、「どうぞ」と出すと、「もう一度」と言われた。丁寧に音もしないように持っていったら、「はい、それでよろしい」と言われた。作法も厳しく昔の躰の道場のようだった。生徒をとにかく1人の人間として育てたいという願いをもって、どこに出しても大丈夫という人に育てたいという願いをもっていたと思う。このような厳しい教育を受けたことが今の立場（園長）になったときに、役立っている。勤めてからではなく、学生の時に学び、身に付けることがすごく大事だと思っている。

入学して5月の頃、金太郎の像やこいのぼりの鯉など端午の節句に必要などんな小さなものでも全部手作りするように指導された。とにかく飾りの自然物は、いろいろと考えて、それに似合うようなものを出すように指導された。お雛さまも、屏風からお椀、何でもそうであった。明世が親王さま、友達がお姫様を作る担当になった時、アルウィン先生から、「日本橋の三越の隣に人形屋さんがたくさんあるから似合うお着物をお選びください」と指導された。お友達と2人でたくさんの人形を見ながら、生地を決めたりしたこともある。

アルウィン先生は、言葉遣いはとっても丁寧であるが厳しい先生であった。「てにをは」なども詳しく指導された。童話の作成は、子どもが理解しやすい言葉に直された。研究心、

観察することの大切さ、子どもにわかるように、創造性、想像力、感性を養うことを創作を通して教えてくださった。

叱られ、叱られ、本当に大変だった。このような経験を通して、葉っぱが落ちていると、何にしようかな、つないでネックレスにしようかなど、豊かな発想ができることを学んだと思っている。自然物をおもちゃ（教材）につなげていく。だから落ち葉があると、さあやろうという気持ちになる。

アルウィン先生は持っている洋服もとても素敵で、こんなおばあさんがこんな服を着るかなと思うようなお洋服を着られていた。あの写真の通りです。

令和6（2024）年9月13日、栃木幼稚園の職員室に掲げられているアルウィン先生の写真を見ながら、明世はアルウィン先生の思い出を語ってくれた。明世は在学中のアルウィン先生の厳しい教えを令和6（2024）年9月になっても鮮明に覚えている。アルウィンの教育は徹底していたようである。玉成保姆養成所の卒業生ではなかったが、卒業生を主体とした「幼児教育研究会」に毎回出席していた日の丸幼稚園の北村富士の記述からもその厳しさを窺うことができる。北村富士はアルウィンの人柄とその教育について次のように述べている。

「毎会出席を重ねる中にアルウィン先生のすべてを知ることができました。熱烈なる信仰より生まれた強き信念、真理への探究、その博識、特にフレーベルに傾倒され恩物の深いご研究には心から感銘し、幼児教育の基本は、正にこれぞと確信するようになりました。（中略）

アルウィン先生がいかに教育に徹底され、きびしかったかは次のような例でわかります。先生は本科生に宿題をおだしになり、その宿題が少しでも模倣があつたり、人の話を引用したりすれば即座に全部破いて書き直しをさせます。

これには、破かれた生徒はびっくり仰天して気の弱い無理解なものは退学する人も出るありさま、しかるによくよく考えれば破いたことは決してアルウィン先生の感情ではなく深い教育の意図によるものであることを知り、その信念と愛情のこもった勇気あるご指導に深い敬意を表したことでございます。」（『荒野に水は湧きてーベラ・アルウィンの生涯ー』482～483頁）

平成8（1996）年6月の夏期教育研修の講話「保育の心と祈り」（『夏期教育研修の記録』第29集34頁）において明世が『母と子の遊戯』の講義について、「先生の一言一語が、珠

玉のように感じ、毎回感動で、水をうったように静かでした。人生いかに生きべきか、心のあり方を学んだのです。」とその感動を述べていることに触れたが、この講義はまさしく明世ばかりではなく卒業生たち皆が「玉成の授業で一番感銘を受けた」⁽⁷⁾という。「母と子」の講義については『荒野に水は湧きてーベラ・アルウィンの生涯ー』（279頁）に次のように記されている。

「アルウィン先生の『母と子』の講義は生徒にとって、今までの小学校、女学校、あるいは中学、高校の教育課程の中で一度も受けたことのない内容であった。初講から生徒は厳粛な重みに涙した。先生はこの講義の中で人間として生まれた意義を語られ、愛の神の存在を示し、そして霊に目覚める第二の誕生を望んで、奥深い探求を生徒とともにしようとされた。講義ばかりでなく、実際問題で真心を求めて追求され、親にも及ばない烈しい愛で生徒の一人一人を愛しぬかれた。そしてすべてのことに最善をつくして行なうことを要求された。」

ここに記されている言葉からもアルウィンの「母と子の遊戯」の講義は「実際に役立つ保育学の授業」であったばかりでなく、「人間としてどう生きたらよいかという生活訓練」（松下吉衛の言）の探究の授業でもあったことが理解できる。明世が「人生いかに生きべきか、心のあり方を学んだのです。」と述べていることも首肯できるのである。

ところで「母と子の遊戯」の講義に使われたテキストはフレーベルの著書“*Mutter-und Koselieder*,1844”をA.L. ハウ（1852～1942）が訳し挿絵も日本風にした和紙綴りの『母の遊戯及育児歌』上・下巻（1897・明治30年）と“The Songs and Music of Mother Play” Friedrich Fröbel-By D. Appleton and Company（1895・明治28年発行）（1回生～18回生）、茅野蕭々訳『母の歌と愛撫の歌』（19回生から）が使用されたという⁽⁸⁾。原著の内容は、神から小さき者、いとしき者を授かった母親としての喜びと心の動きからなる7編の詩「母の歌と愛撫の歌」、「一人の人間として発育してゆく子どもと、これを見守り育て上げる母親とのやりとり」を「遊戯の歌」として49編、それぞれに挿絵とその遊びを象徴する手の形が示されている。そして最後の1編「結びの歌」がある⁽⁹⁾。フレーベルは「女子児童保育者並びに女子教育者のための養成所案」において「子どもとの適切な交渉の仕方、鼓舞的な話し方の習得、鼓舞的な児童唱歌の習得・・・人類の生命全体の一部としての子どもの精神生活の発展のための、適切な四肢の陶冶および感覚の陶冶の手段の習得」のために「家庭の書（『母の歌と愛撫の歌』）が基礎として役立つ」⁽¹⁰⁾ことを挙げている。莊司雅子は

この書は「フレーベルの独自の浪漫的な意図のもとに世の母親たちが各自この書によって幼いものの魂を醇化し育成して、純粋な人間の高みへ子供を向上させることのできるような一個の大きな連絡ある陶冶材料である。だからそれは個々の教育規則を世の母に伝えようとする御談義などではなくて、全く芸術的に編まれた母の聖書ともみるべきものである。」⁽¹¹⁾と評価してる。アルウィンは幼児教育の理論と實際をアメリカで学び帰国後日本の各地の幼稚園や保姆養成所を視察して研究し、更にドイツに赴いてマリエンタール・フレーベル学園で、続いて大正3(1914)年にはイタリアに渡りモンテッソーリから直接感覚教育の理論と實際を学んでいる。アルウィンはモンテッソーリの感覚教育を評価しているが、神との一致を目指すフレーベルの思想により深く傾倒しているので、「家庭の母親を直接教育するための注目すべき著作」であり、「母の聖書ともみるべきものである」⁽¹²⁾『母の歌と愛撫の歌』をテキストとして指定したものと思われる。ちなみにハウは、日本における保姆養成の先駆者でありアルウィンもハウからも多くのことを学んでいる。

アルウィンは大正4(1915)年の夏、文部省普通学務局主催で開催された「全国幼稚園関係者大会」終了後の懇話会で勧められて「モンテッソーリ女史の教育を観て」と題する談話を行っている⁽¹³⁾が、その中で「私は暫くの間フレーベルの児童教育法を研究いたしました。『恩物』または『母と子の遊戯』の奥にひそんでる意味は、研究すればする程私たちに言い得ぬ程の深い意味を児童教育の上に与えてくれると存じます。」⁽¹⁴⁾と述べ、モンテッソーリの教育もよい点がたくさんあるがその多くはフレーベルの教育の中に含まれていることを論じている。アルウィンにとってはフレーベルの神髄は「恩物」と「母の歌と愛撫の歌」であったのである。アルウィンはキリスト教的人間愛の目と心をもって、徹底したフレーベルの精神・恩物教育とモンテッソーリ主義教育で保育者養成を行った。

明世は立教高等女学校時代に聖公会キリスト教教育を受けているので、アルウィンの説くフレーベルの恩物教育や「母と子の遊戯」の教育的意図をより深く受け止めたのであろう。更に明世は父園長とアルウィンの保育理念が同じあることに気づいてその教えに感謝し、今でもその教えは自己の保育の中に繰り返し生かされていることを次のように語っている。

「教育要領が新しく改訂され、皆さんも勉強されていると思いますが、健康・人間関係・環境・言葉・表現の五つの柱がありますね。そして、それぞれ心情・意欲・態度とねらいが、かけられています。

私が学んだ故アルウィン師の保育理念は変わっていないことに気付かされ、保育の真髄は、そう変わるものでないと、今気付かされているのです。

父園長が話してくれた『子どもから学ぶ』ということが理論と実際の面からアルウィン師によって目を覚まされました。

師から受けた影響は大きく、保育をここまで続けてこられたのは、先生のお陰と感謝の気持ちでいっぱいです。

今でもその教えは保育の中に繰り返し生かされています。」(平成8年6月『夏期教育研修の記録』第29集「保育の心と祈り」35頁)

ここに記されている「教育要領」とは幼稚園の教育課程と保育内容の国家基準示す「幼稚園教育要領」のことで、平成元(1989)年に改訂された幼稚園教育要領は、保育内容を従来の6領域から5領域に変更している。明世は父吉衛の「子どもから学ぶ」理念とアルウィンの愛に基づく保育は何時の時代にも不変で現在の幼稚園教育要領にも通じていることを洞察している。松下吉衛・明世親子のソフィア・アラベラ・アルウィンに対する一方ならぬ敬慕の情が伝わってくる。

2 松下明世における「童心拝育」の保育－どのように理念を受け継いでいるか

(1)「童心拝育」の保育理念とは－松下幼稚園園長松下吉衛の保育理念

明世が「幼稚園をやっ払いこう」と決意したのは、童心拝育そして宇宙の意志の二大特性－創造性(げんき)と調和性(なかよし)に基づく幼稚園の教育理念・教育目標を、「いろいろな例を出しながら、話してくれ」た父の言葉を理解したからである。

娘明世の「童心拝育」観に触れる前に、父吉衛が「童心拝育」を幼稚園教育の中核に据えた経緯と「宇宙の意志の二大特性－創造性(げんき)と調和性(なかよし)に基づく」幼稚園の教育目標とは何かについて触れておきたい。

「童心拝育」という成語は松下吉衛の造語である。早稲田大学在学中から栃木青年夜学校を開設したり種々の青年運動に参加していた松下吉衛は大正2(1913)年7月大学を卒業し、栃木町に幼児教育施設が欠けていたので「御奉公」の気持ちで幼稚園の創設を決意する⁽¹⁵⁾が、しかし幼児教育については無知であった。松下吉衛は昭和47(1972)年11月19日に挙行された創立60周年記念祝典式辞「感謝と祈り(この道六十年)」の中で、「拝育」という成語は幼稚園を創始するにあたって「幼児教育のありようを一生懸命探求している最中にひょこっと授かった天来の思想に外ならない」と次のように述べている。

「幼児教育について全然無知でしたので一生懸命勉強を始めました。ペスタロッチ、フレーベル、ルッソー、モンテッソーリ等々の著書を初め参考文献を手の届くかぎり読ませてもらったり、また東京中心の有名幼稚園を歴訪して園長先生たちに親しく教えを乞ったりしました。こうして幼稚園を創める心構えが段々と整いつつありましたが、英国の有名なイートンハーロー校の一教師が生徒に何時何処で行き会っても必ず自分の方からお辞儀をすることにしており、そのわけを問われますと、生徒に無限の可能性がある。私に敬意を表さずにはいられない。と答えたという逸話を聞かされたり、またあの Child is Father of man. (こどもはおとなの父である) という格言に出会ってとても深い感銘を受けたりしまして、私の心にふと「拝育」という考えが生まれたのです。そう、こどもを拝み育んで行くのだ。教え込むのではない。こどもの持って生まれた本質を童心を拝み拝んで育てるのだ。ようし、これで行こう、と決心がついたのです。

この「拝育」という成語ですが、寡聞のわたしにわ如何なる教育書にもいまだに見い出せませんのです。これわ私如きが成語したというのではなく、幼児教育のありようを一生懸命探求している最中にひょこっと授かった天来の思想に外ならないと、今も信じて疑わないのであります。」(創立 60 周年記念祝典式辞録音「感謝と祈り(この道六十年)」昭和 47 年 12 月 8 日第 1 版 3～4 頁、表音式仮名遣)

松下吉衛によれば、「拝育」という成語はペスタロッチ、フレーベル、ルッソー、モンテッソーリ等々の教育学・保育学の基本的な文献から児童中心の教育について研究し、東京女子高等師範学校附属幼稚園などの有名幼稚園を歴訪して幼稚園教育の第一人者であった倉橋惣三や他の園長などから直接に保育の理論や実践を学んだ。また英国の有名なイートンハーロー校の一教師が無限の可能性のある生徒に敬意を払って自らお辞儀をするという逸話を聞いたり、Child is Father of man. (こどもはおとなの父である) という格言に出会ったりして、幼児教育のあるべき姿を「一生懸命探求している最中に」「授かった天来の思想」である。それは子どもを尊び「子どもから学ぶ」ということで、子どものもって生まれた純乎として純なる本具を確認し、謙虚な祈りの心をもってその本具を育てることである。

「童心拝育」について松下吉衛は『父母の書』においては項目を立てて次のように記している。

「童心拝育」

こども
 児より高いところにいて物事を教えてやるといったような態度は間違っていると思われる。寧ろ純一無雑な童心を拝み拝んで、そこからヒントを受けて育み方を教えてもらうという、

世間のあり方とは正反対な態度こそ本当だと確信して疑いません。」⁽¹⁶⁾ (262 頁)

松下吉衛によれば、教師は高いところにいて子どもに物事を教えてやるというような考え方は間違いで、純一で混じりけのない童心に敬意を払い、そこからヒントを得て育み方を教えてもらうという世間の考え方とは正反対の考え方が真実であるというのである。

吉衛は別の機会に、園長の立場として園児の遊んでいる姿に教えられて、環境を整えることの必要性を学んだことを次のように述べている。

「園児が脇目も振らずに泥まみれになって打ち込んで遊んでいる様を観てわ何か大変教えられるものがあつた。

これだ！ こゝが大事だ！ 園児達がこのように夢中になって遊べるように幼稚園の環境を整え、教具教材を豊かに備えることが何より必要だ。

園児達のこの姿！ 何と生き――張り切っていることか！ これでいゝのだ。遊戯三昧ゆうげさんまいというものがこれだ。」(ルビ・表音仮名遣原文のまま、『増補私の求道』はしがき)

松下吉衛は「童心拝育」成語の経緯に続いて「創造と調和」が「本園の保育内容の根幹を形成することになった事情」について式辞「感謝と祈り（この道六十年）」において、次のように述べている。

「人類－我々人間にわどなたでも内観すればおわかりのように二つの根本的要求があります。即ち一つわ授けられた諸能力を出来るだけ発揮したいという要求であり、もう一つわ自分以外の一切のものと一体になりたいという要求であります。これらの要求がそれぞれ人類の使命として創造と調和とに当るわけであります。能力発揮の結果が人類文化の進展を見るわけですが、無制限に能力発揮を行い合うと他を損い他と衝突する場合が生じます。そこでどうしても自他一体感－万物と調和したいという要求が人間に本具されているのだと思われまふ。宇宙のことをギリシヤ語でコスモスというていますが、これにわ“それ自身に秩序と調和をもつ世界”という意味があるそうで、今更でわありませんがギリシヤの哲人に敬意を表したく思います。

さてこうした哲理を幼児教育に引き当てますと創造が『げんき（元気）』となり調和が『なかよし（仲よし）』となりまして『げんきでなかよし』が本園の標語（モットー）となった次第であります。」(創立 60 周年記念祝典式辞録音「感謝と祈り（この道六十年）」昭和 47 年 12 月 8 日第 1 版 6 頁、表音式仮名遣)

こうして松下吉衛は「童心拝育」の理念を幼稚園教育の根幹に据え、子どものもって生まれた純乎として純なる本具、即ち生まれつき備わっているもの、それは宇宙の意志・人類に与えられた2つの使命の「創造と調和」であることを発見して、「望ましい幼児の理想像」に置き替え「元気な良い子、創造性豊かで元気であり調和が良い子」を幼稚園の目標にするのである。栃木幼稚園園長松下吉衛は昭和50（1975）年7月の「幼稚園観察」の折、「保育観察」と題して「拝育」と「望ましい幼児の理想像」について学生たちに次のように語っている。

「『拝育』という気持ちを先生方にわかってもらい、一日の保育にあたってもらいます。それから私は、望ましい幼児の理想像を考えました。そして大宇宙の意志を考えました。宇宙の意志には二つあることを発見しました。『創造と調和』であると。このことを子供に当てはめてみれば、元気な良い子、創造性豊かで元気であり調和が良い子であります。ですから、元気な良い子になれますようにと毎日祈っています。簡単な表現ですが、『創造と調和』は、人間の根本的の二大欲求だと思います。」（昭和50年7月『夏期教育研修の記録』第8輯15頁：テープ起こし不詳）

「童心拝育」「創造と調和」の保育理念・保育目標は初代園長松下吉衛の幼稚園創設の究極の理念である。この理念を次女の明世が受け継ぎ、幼稚園で働く「先生方にわかってもらい、一日の保育にあたってもら」うことが初代園長松下吉衛にとっては重要な課題であったのである。

（2）松下明世における「童心拝育」の保育理念と保育目標「創造性と調和性」

父の幼稚園教育に対する思いと娘への期待を理解し「幼稚園をやってみよう」と決意した松下吉衛の娘松下明世は「童心拝育」「創造と調和」の保育理念・保育目標をどのように継承し実践しているのだろうか。『夏期教育研修の記録』の中に残されている明世の講話の記録から探してみたい。

松下明世の幼稚園教育の理想と実践には常に父の提唱した「童心拝育」「創造と調和」の理念が存在している。松下明世は折に触れて父吉衛が「童心拝育」を保育理念にした経緯について語るのである。平成5（1993）年6月の栃木幼稚園長講話では「保育目標としての創造性と調和性」と題して、次のように述べている。

「創立以来、この園の教育理念は『童心拝育』、こちら（なかよしの部屋・ホール・遊戯室）と玄関を入ったところに掲げられています。

イギリスの有名なイトンハロー校の一教師が、生徒にいつ何処で会っても必ず自分の方からお辞儀をすることにしており、そのわけを聞きますと、生徒には、無限の可能性がある。私は敬意を表さずにはいられない。と答えたという逸話があり、又ワーズワースの“Child is Father of man”（こどもは大人の父である）つまり子どもから学べという言葉に、深く感銘をうけ、そうだ、子どもを拝み育んでいく、教えこむのではない、『子どものもって生まれた本質を、つまり童心を拝み拝んで育てる』という考えが一生懸命探求している中に、天来の思想として（父に）授けられました。そして、『童心拝育』が本園の教育理念に決められたのです。」（平成5年6月『夏期教育研修の記録』第26集26頁、テープ起こし：栃木幼稚園観察学生代表）

以上の言葉は先に記した松下吉衛の言葉と同趣旨である。明世は「童心拝育」とは「子どもを拝み育んでいく、教えこむのではない、子どものもって生まれた本質を、つまり童心を拝み拝んで育てるという考え方」である、と説明している。

父吉衛の言葉と娘明世の言葉を比較してみよう。

「またあの Child is Father of man.（こどもわおとなの父である）という格言に出会ってとても深い感銘を受けたりしまして、私の心にふと“拝育”という考えが生まれたのです。そうだ、こどもを拝み育んで行くのだ。教え込むのでわない。こどもの持って生まれた本質を童心を拝み拝んで育てるのだ。ようし、これで行こう、と決心がついたのです。この“拝育”という成語ですが、・・・これわ私如きが成語したというのでわなく、幼児教育のありようを一生懸命探求している最中にひょこっと授かった天来の思想に外ならないと、今も信じて疑わないのであります。」（父の言葉）

「ワーズワースの“Child is Father of man”（こどもは大人の父である）つまり子どもから学べという言葉に、深く感銘をうけ、そうだ、子どもを拝み育んでいく、教えこむのではない、『子どものもって生まれた本質を、つまり童心を拝み拝んで育てる』という考えが一生懸命探求している中に、天来の思想として（父に）授けられました。」

（松下明世の言葉）

ここで興味を惹かれるのはワーズワースの「“Child is Father of man”（こどもは大人の父である）」という格言である。吉衛はこの言葉に出会って深い感銘を受けたことを記しているがその意味内容についてはここでは記述していない。明世は「“Child is Father of

man”（こどもは大人の父である）」という格言は英国の詩人、ワーズワースの言葉であり、その意味内容を「つまり子どもから学べという言葉」とであると理解している。「“Child is Father of man”（こどもは大人の父である）」という言葉は明世にとっては「童心拝育」の成語と対になる語句なのである。ちなみにこの言葉は、ワーズワース（William Wordsworth 1770－1850）の享和2（1802）年3月の作「虹」の中の一行で、訳者田辺重治は「子供時代の心が基調となって大人の思想感情が生み出されるの意である。」と注を付している。（『ワーズワース詩集』昭和44（1969）年第32刷発行、岩波書店219頁）

学校法人耀光学園のホームページ（平成24（2012）年9月20日取得）に「大正2年以来、ひとりひとりの子どもから教えられた共通して、大切なことは『Listen to Nature』（「自然の声に耳を傾けよう」と訳しています）です。W.Wordsworthの『Child is father of man』の訳、『子供は大人の父親である』に唱われるように、自然の声に耳を傾けています。」とある。「自然の声に耳を傾けよう」の語句は、ルソーの自然に従う教育を彷彿させるが、一人ひとりの子どもの本性、自然性に耳を傾け、持って生まれたよいものを見つけ出して育成する童心拝育の理念につながるのである。「自然の声に耳を傾けよう」この言葉にはもう一つの意味が含まれている。それは春夏秋冬など自然の法則を感じ感性やその恵みに感謝する心を育てることである。平成元（1989）年の若葉幼稚園観察の折に学生に配付された資料「若葉幼稚園の教育目標と理念」に次のように記されている。

「Listen to Nature という言葉を私どもは『自然の声に耳を傾けよう』と訳しています。これは、昭和2年来、多くの子ども達に関わり、表現しきれぬ程の体験がありました。ひとりひとりのこどもに私達は教えられ、その流れの中でこどもの教育の場に立って、共通し最も大切なものは何かという原点を考えた時、この言葉が生まれたのです。

四季の移り変わりの中で、多くの生物が目ざめ、生長し、やがて次の代へと営みをくりかえしています。大地はその営みの場を与え、自らも生き、光はそれらをしずかにつつんでいます。その自然のもつ営みから多くの事を学び、より深くこども達に関わらせたいという祈りから生まれた言葉でもあるのです。（中略）

Listen to Nature 自然は惜しみなくこども達に愛と恩恵と感謝の心を芽生えさせ、こども達は自然の中で躍動し、心と体が限りなく育っていきます。」

松下明世の「童心拝育」の保育理念が端的に表出されている講話はまさしく平成18（2006）年6月に若葉幼稚園でなされた「童心拝育」と題された講話である。ここで明世は教育（保

育) 理念や教育 (保育) 目標が日々の保育にどのように関係するのかを述べている。

「幼稚園には、それぞれに創立当時からの建学の精神とそれに基づいた教育理念があります。若葉幼稚園では年間の計画や教育課程をふまえて、今の時間にどういった活動をするのかを決め、ねらいや保育内容を考える日案があります。この年間計画は勿論、日案を決める根本的なことは、園の教育理念です。

若葉幼稚園の教育理念は『童心拝育』です。『童心』というのはお子さんの心です。“わらべの心”ということです。『拝育』というのは、我々の保育にかか(わ)る精神のことです。『拝育』というのは、神仏に礼拝するような謙虚な心持ちということです。

安易に先生という言葉がつかわれますが、本来は教育に携わることができるのは、聖人君子です。本当に立派で精神的にもすべて神に近い方が教育をできるのではないかと思います。しかし、我々は、凡人ですから、神仏に礼拝するような謙虚な気持ちでお子さんに関わらないと、間違えてしまいます。よく子どもから学ぶといいますが、これがその事です。皆さんの感想の中に、先生は一人で20人以上のお子さんを見ているというのは、本当にすごいという内容がありました。先生は本当に大変ですが、先生はお子さんに対して深い愛情を持っています。一人一人全部把握して、初めて保育ができるのではないかと思います。」(下線原文のまま、平成18年6月『夏期教育研修の記録』第39集64頁。テープ起こし：石原佐穂)

ここではまず幼稚園には、創立当時からの建学の精神とそれに基づく教育理念があることを述べ、次に「年間の計画や教育課程をふまえて、今の時間にどういった活動をするのかを決め、ねらいや保育内容を考える日案」があること、そして「この年間計画は勿論、日案を決める根本的なことは、園の教育理念です」と、教育理念が幼稚園教育においてどのような役割を果たしているのかを説いている。教育課程や指導計画の根本となっているもの、教育課程や指導計画を左右するもの、日々の保育の根本となっているものが「園の教育理念」で、本園の教育理念は「童心拝育」であることを説明している

明世によれば、童心とは、「子どもの心」、「わらべの心」のことであり、拝育とは「保育者の保育(子ども)に関わる精神のことで、神仏を礼拝するような謙虚な心持ちで子どもに関わること、それは“子どもから学ぶ”という姿勢に外ならないのである。明世の教育観の根底には、幼稚園を「やっていこう」と決意する前に抱いた「本来教育に携わることができるのは、聖人君子です。本当に立派で精神的にもすべて神に近い方が教育をできる

のではないかと思います。しかし我々は、凡人ですから、神仏に礼拝するような謙虚な気持ちでお子さんに関わらないと、間違えてしまいます。」という戒めの言葉が存在している。「先生はお子さんに対して深い愛情を持って」「一人一人全部把握して、初めて保育ができるので」ある。

次に父吉衛が発見した「宇宙の意志」の2大特性「創造」「元気」が教育目標になった経緯について明世はどのように語っているのか見てみよう。

昭和 61 (1986) 年 6 月の夏期教育研修、若葉幼稚園観察時の「園長講話・座談会」に松下明世は副園長として出席し教育目標について次のように述べている。

「さて、今差し上げたプリントの中に、教育の目標というのが書かれてありますし、理念というのが書かれてありますけれど、我々は生まれようとして生まれた者はいないし、自然に、目に見える自然は皆そうだと思うんです。けれども、もっと元から考えてみると、それは、作られたもので、誰か創り主というものがいるわけですし、それを園長は（松下吉衛）は『宇宙の意志』というふうに（とらえました）。だからキリスト教でいえば神であり、仏教の仏様とは一寸違うんですけども、そういうふうな神様で、そういうことが最も大切だという理由と宇宙の意志・・・ということを断定づけたりしてね。宇宙の意志というのは、例えば、自分でものを作るというふうな大変積極的な創造性とか、春が来て夏が来て秋が来て冬が来てという、本当にその自然の法則というか、きちっとした調和というか、そういう二つの性質を持っているということから、ここの園では、創造性と調和性という、我々が考えても、本当に自分は作るのが好きだから、こういうものを表してみたいという、積極的な面と、それからお友達と本当に仲良くしたいという調和というか、そういうことがありますでしょ。で、子ども達にそれを言っても解からないので創造性はここに書いてある“Creation”それを「元気」と言って、あと“Harmony”というのを、調和性の方を「仲良し」というふうに言うておまして、元気・仲よしというのがこの教育目標になっております。その二面を毎日の保育の中におろしながら、結局その建学の精神にかえりながら、狙いを子ども達におろしていろいろな活動をさせながら毎日の生活に繋げるといって見ているわけです。」(昭和 61 年 6 月『夏期教育研修の記録』第 19 輯、32 頁：テープ起こし不詳)

平成 5 (1993) 年 6 月の講話では「保育目標としての創造性と調和性」と題して「宇宙の意志」の特質が教育目標に関係することに触れている。

「次に教育目標についてお話し致しますと、この世の総ては、造物主によってつくられたものです。わかり易くいえば、私達は生まれようとして生まれた人は一人もいない筈です。万物も同じです。また、冬来たりなば春遠からじ、春夏秋冬この季節の繰返しを考えても、はかり知れない全能力を認めざるを得ません。この全能力を『宇宙意志』という考え方をしていくと、この宇宙意志には二つの大きな特質があり、一つは授けられた諸能力をできるだけ発揮したいという要求－創造性 Creation－であり、もう一つは自分以外の一切のものと一体になりたいという要求－調和性 Harmony－です。

能力発揮の要求をのみ行い合うと、他を損ない、衝突する場が生じます。又物みな総て万物と調和したいという要求も、人間には具わされています。

こうした哲理を、幼児教育に引き当てますと、創造が『げんき』となり、調和が『なかよし』となりまして、『げんきでなかよし』が本園の教育目標となったのです。東門から入っていらっしやると、丁度外壁に、Creation and Harmony という字が御覧になれますが、保育に携わるものはいつも心にとめておくという意味合いがあって刻み込んだわけです。」(平成5年6月『夏期教育研修の記録』第26集26頁：テープ起こし不詳)

「この世の総ては造物主によってつくられたもの」である。この言葉を明世は次のように解している。生まれようと意志を持って生まれた人はいない。万物も同じである。冬が来たならば春はすぐにやってくる。春夏秋冬の季節が繰り返される。このことから考えても計り知れない全能力の存在を認めざるを得ない。この全能力を「宇宙の意志」と捉えている。この「宇宙の意志」には「創造」と「調和」の2つの要求がある、この要求を子どもたちが理解しやすいように、「元気」と「仲良し」と表現し保育目標の骨子としているのである。

松下明世は、学生に対する「講話」の中で毎年父吉衛園長が提唱した童心拝育の保育理念及び父が発見した宇宙の二大意志から導いた「望ましい保育の理想像」「創造と調和」の保育目標を取り上げて説明し、父園長の後継者としての役割を果たそうとしているかのようと思われる。

(3) 松下明世における「童心拝育」の保育理念の神髄－「師心」

これまで見てきたように、松下明世は父吉衛の提唱した保育理念「童心拝育」を、神仏を礼拝するような謙虚な心持ちで子どもに関わる事、子どもの天性自然性を“子どもから学”び祈りの心をもって育てる事と理解し、その姿勢こそ保育者の本来の姿として捉え自らもこの姿勢に立ち戻り、職員にも指導している。明世は、幼稚園における教師の役割について

昭和 63 (1988) 年 6 月、若葉幼稚園園長「講話」において次のように述べている。

「幼稚園で行われる教育は、子どもが好きだから出来るという程、易しいものではない。子どもは幼稚園で友達とふれ合い、遊びながらいろいろな事を経験し、学び育っていく。その場を与えるのが幼稚園であり、その子の個性を引き出しながら、どう育つのが望ましいか、育ちの方向を見極め、対処するのが教師であり、幼稚園の立場である。

創立以来、本園の教育理念は『童心拝育』で、その子のもって生まれた本来の童心を祈りの心をもって育てるということであるが、教師の人となり、言葉遣い、服装、考え方等の子どもに与える影響は極めて大である。また教師は、子どもを観るのに、子どもの目の高さに自分をおかないと理解出来ないとよくいわれる。

英国のワーズワースが『子どもは大人の父である』という名言を残されているが、子どもから学ぶ、その心こそ教師の本来の姿勢ではなかろうか。」(昭和 63 年 6 月『夏期教育研修の記録』第 21 輯 51 頁: テープ起こし不詳)

ここでは幼稚園及び教師の役割について語り、更に幼稚園の保育の特性と教師の専門性について次のように述べている。

「幼稚園の保育は、小学校の教科別授業と異なり、参観してわかるように、総合活動であるから園の門を入った時から遊び(活動)が始まっている。教師は、今日の活動がその子どもにとって楽しく興味をもって意欲的に取り組めていたか、或いは教材選択に問題はなかったか等を反省考察し、それをふまえて明日の保育にどうつなげるかを常に研究している。」(前掲書 51 頁)

これまで見てきたように、松下明世は、端的に言えば、拝育を保育者(教師)の心の持ち方として捉え、それを「師心」と表現している。童心拝育の神髄は明世の言葉を借りれば「師心」(教師の心)と言えよう。それでは、保育者の心・師心と具体的な保育者の資質については明世がどのように説いているのか、「講話」から探ってみたい。

昭和 61 (1986) 年 6 月の「園長講話・座談会」において若葉幼稚園副園長としてこれから教育者・保育者を目指す学生に対して次のように論している。

「私どもの願いとしては、本当によい幼稚園の先生になるために、一番大切なことを申し

上げたいと思うんです。まず、なんといっても健康です。ごらんのように、思いっきり体をぶつけながら遊んでますからね。それに対応できる体づくりというのは本当に大切なことです。後は、子ども達が大好きな先生は遊んでくれる先生。遊ぶというのはただ無我夢中で遊ぶんじゃなくて、わかってくれる先生。というのは心のある先生。難かしいことなんですけどね。大好きということはただ猫かわいがりではだめでして、いけない事はいけないとちゃんとと言わなきゃならないしね。それから、明朗かつおだやかな先生。そのおだやかな中にも芯のある先生。感動できる先生。感じられる先生。『おはようございます』と言ってくれた時に『おはよう。元気で来たね』と、もうにこにこ体中で答えられる先生。それと何でも関心を持つ先生。難しいけれど、これも大切だと思うんです。」(昭和 61 年 6 月『夏期教育研修の記録』第 19 集 39 頁: テープ起こし不詳)

教師の資質を以上のように列挙した後に「それともう一つ、これも大変難しいことなんですけれど」と断り、子どもたちは先生を「神様」のように感じ先生の一举手一投足に影響を受け、クラスの先生のカラーに染まってしまう。先生になれる人は「聖人君子」で「教え育てる人」であると捉えるなら、凡人の我々は先生になっていられない。だから凡人の我々が教師になるために一番大切なことは「師心」とであると次のように述べている。

「一番大切なのは師心。教師の心。師心というのは何かというと、子どもの心が分かって、謙虚さがある。で、こういうふうな子どもになってほしいという願いを祈りに近いぐらいに本当にもう謙虚な気持ちで、そういうことを願いながらできる。それが本当の師の心だと思うんです。そういう先生になってほしいと思います。子どもは大人の師である。

難しいことを申し上げましたけれど、このことはこれから先生になる方へのお願いです。」(前掲書 39 ～ 40 頁)

幼稚園教師にとって一番大切なのは師心、教師の心である。師心とは子どもの心、即ち感情や意志・欲求などを理解しようとする謙虚な態度である。子どもの心を理解してこのような子どもに育ってほしいという願いを持ちながら保育をすることができること、子どもは大人を導いてくれる師として子どもを尊敬し謙虚に受け止め、子どもに備わっている天性、自然性を見極めて創造性や調和性を発揮できる人間に育成することである。

平成 5 (1993) 年 6 月の講話記録「保育目標としての調和性」の中では「師心」の重要性について次のように記されている。

「次に『師心』についてお話致します。

幼稚園に勤務するようになると子ども達から『先生』とよばれます。『先生』という言葉は、先に生まれると書きますね。そうです。ただ子ども達より先に生まれたんだと気がつけばよろしいのですが、ともすると先生と呼ばれることで、恰も一国一城の主になったような錯覚をもってしまいがちです。

本来、人を教える立場をとる人は、聖人というか、殆ど非のない完全無欠な神様のような方なら、その資格があるでしょう。然し世界中探しても、それは不可能です。

先程、教育理念のところでお話したように、童心拝育、少なくとも自分よりは、よい人間になって下さい。という祈り心、教師の心、つまり師心をいつも覚えて保育にあたるようにと、私自身にも問いかけ、本園の職員にも話しています。」(平成5年6月『夏期教育研修の記録』第26集26頁:テープ起こし不詳)

ここでは、師心とは「童心拝育、少なくとも自分よりは、よい人間になって下さい。という祈りの心、教師の心」で「師心」を忘れず保育の当ることの重要性について述べている。

この「師心」については父園長がすでに創立60周年記念祝典式辞「感謝と祈り(この道六十年)」の中で次のように語っている。

「・・・保育の実績をあげるにわ何というても直接こどもさんに接している先生の在り方が一番肝心です。それで私わ常々先生がたに心からお願いして、毎朝保育を始めるに当って
“どうぞこどもさんたち！ 少なくとも私より、よりよい人間になってください。”

と祈っていただきたいと申しているのです。この祈りを私わ恩師の、中桐確太郎教授に教えられ⁽¹⁷⁾、師心と呼んで先生たるものの寸時も忘れてはならない必須の心掛けと信じています。この師心この祈りがなければ、ひとり幼稚園の先生に限らず、どの学校の先生でも大学教授といえども教師たることわ許されないと思います。」(創立60周年記念祝典式辞録音『感謝と祈り(この道六十年)』昭和47年12月8日第1版8頁、表音式仮名遣)

娘明世の心には常に父園長の言葉が存在していることが明らかである。

平成8(1996)年6月の栃木園長講話「保育の心と祈り」の記録では、幼稚園にとって人的環境である教師が重要でその資質について記されている。

「今、環境の教育が重視され、子どもに適した環境を与えて、自主的に興味をもってかか

われるようにしていますね。保育室、或いは、園庭等は物的環境といいますが、一番大切な環境は、人的環境つまり教師です。

朝、登園して『おはよう』の挨拶から帰るまで、教師は子どもとかかわるわけです。タテ・ヨコ・ナナメ、そしてウシロから見つめられ、小さくても五感を最大限に効かせて、先生の言葉に耳を傾け、感じ取っているのです。

幼稚園の教師は、クラスの中で、一国一城の主的存在で、相手が幼いために、教師の批評も批判もしないでしょう。ですから恐いのです。

そこで、どこをとっても、まねされていい先生になっていただきたいと思います。

『いつでも公平で、明るい心』『思いやりの心』『共感する心』『謙虚な心』『センスのよい、身だしなみがきちんとしている』『健康であること』

6つの事をあげましたが、加えて、よい絵画・文学・音楽等にふれ視野を広めるようにしてください。人間として豊かな経験をもつことは、素晴らしいことです。」(平成8年6月『夏期教育研修の記録』第29集36頁:テープ起こし桑野眞理子)

明世は父吉衛と同様に幼稚園教育にとって人的環境である保育者の保育に向かう心構え、子どもをどのように考えて保育するのかいわば子ども観・保育観(師心)の重要性について毎回学生に語っている。松下明世は恩師アルウィン先生と同様に子どもたちを深く愛し尊敬し、よりよい成長を願って幼稚園教育に携わってきたのである。明世の「師心」がひしひしと伝わってくる。

3. 松下明世の幼稚園経営・保育実践－「童心拝育」「創造性と調和性」の保育理念・保育目標の実践の具象

栃木幼稚園の施設設備は幼児の活動や遊びの中で創造性の発揮と調和性の育ちを意図して設置されている。本章では、園舎の特徴について明世先生の説明と見学から述べていきたい。尚、施設設備の図(写真)は、令和6(2024)年6月及び9月に筆者らが撮影したものである。

栃木幼稚園の現園舎(図1)は、昭和56(1981)年に新築されている。栃木幼稚園のホームページ⁽¹⁸⁾には、「園舎・遊具は私共の考え方と保育経験で得られた教訓を、当時の建築技術の可能性を追求して、造りました」とあるように、子ども中心に考えられた細かな工夫が随所に施されている。

まず、玄関を入るとすぐ目の前に、父吉衛先生揮毫の「拝育」の大きな額（図2）が掲げられている。そして玄関を上ると右横に職員室があり、この部屋の窓から、中央の広場（図3）、太陽の広場（図4）、砂の広場（図5）の3つの広場と子どもの部屋がある園舎全体を見渡することができる。

中央の広場は、ジャングルジムや滑り台等の遊具が設置され、広場の中央には大きなトチノキがあり、自然のジャングルジムになっている。年長の子どもたちが木に登り、それを見上げている年少の子どもたち、教員は安全に配慮しながら、子どもたちの様子を見守っているようだ。大きなトチノキの葉や花、実の観察、そしてそれが製作活動へと広がっていくという。

砂の広場は中央広場より40cm掘り下げられ、3段の階段下に設営されている。その段差を利用して、子どもたちが砂場に座り、一番上の段をステージにして、子どもたちの発表や集会、紙芝居なども行うことができる。なかよしの部屋の下にあり、雨天でも砂遊びが可能であり、夏の炎天下でも楽しく遊んだり、集いを開くこともできる。更に壁には季節ごとの壁面製作が掲示されるのである。

太陽の広場は園舎の2階に設置されている。屋根はないが上からシャワーが出てくる施工となっている。夏はジャブジャブ池に変身し水遊びができる。更に、中央広場のトチノキの樹頭が眺められる。春にはトチノキの白い花が咲き、秋には木の実になる植物の成長が身近に五感を通して感じられるのである。この場所は爽やかな風が通り抜ける心地よい広場となっている。

なかよしの部屋（図6）は2階にあり、全員が集まれる大きなホール（遊戯室）である。お誕生会や様々な行事、そして日常の保育活動の中でも活用されている。背面には季節ごとに大きな壁面製作が掲示されている。サイドのベンチの下にはキャスター付きのおもちゃ箱が入っている。ステージの高さは子どもたちが座って鑑賞するのに適した高さに設定されている。更に、ステージ上の天井（図7）にも工夫がされている。当時、三越劇場や歌舞伎関係の舞台の視察をもとに設計されたという。行事ごとの壁面製作や背景などが簡単に吊り下げられるように、板をはらず木が交互に組まれるなどの工夫がされている。

2階のなかよしの部屋と太陽の広場の間に「ネットの森」（図8）と呼ばれている天井の高い空間がある。そこには2本のロープの間に細い木が渡されたロープの梯子が設置されている。梯子を登っていくと、天井には網がかかっており安全面の配慮がなされている。この場所は子どもたちに人気があり、卒園した小学生が時折登りに来るという。

園内には、光の階段（図9）、見晴らしの階段（図10）、おとぎの階段（図11）と名付け

られた3つの階段がある。階段は単に1階と2階をつなぐだけではなく、楽しい空間、遊びの場である。階段の斜度は3つの階段がすべて同じ斜度に設計されており、園児が上りやすく、滑りにくい材質で造られている。光の階段はガラス張りになっており、階段を上り下りしながら、日の光や雨、風の音など自然現象に気づき楽しめる空間になっている。見晴らしの階段はとても眺めがよく、全園を見渡すことができる空間である。おとぎの階段は2階の子どもの部屋へと続くらせん状の階段である。その階段を上る園舎の壁は、赤、黄、緑、水色、紺の5色でデザインされ宇宙を象徴し、その上に白く描かれた円形は太陽を表しているという。

また、トイレの壁には、明世先生が色や絵柄を考慮して選ばれた外国製のタイルが貼られている。水道の蛇口は、子どもたちが水を飲んだり、手を洗ったりすることができるように、上下に回転する衛生面でも配慮されているもので、水を出す取手も子どもたちが操作しやすいレバー式のものが設置されている。

このように園舎や施設は、細部に至るまで、子どもたちの園での生活が最大限に発揮できるように工夫がなされていることが、明世先生の説明や見学を通して伝わってきた。

また松下幼稚園創設当初から「子どもから学ぶ」をモットーにしていることから理解できるように、栃木幼稚園・若葉幼稚園は子どもたち一人ひとりの人権を大切にしている。その一つの具象が「誕生会」である。大切な行事の一つである「誕生会」がどのようなになっているのか「誕生会ノート」を手掛かりに見てみたい。

誕生会は「うれしい日」、「大きくなった記念日」を皆でお祝いをする日である。とても大切な日として捉えられ計画や準備が周到になされている。

父松下吉衛先生が園長だった時代から「誕生会」は実施されており、その記録は、年度ごとの「誕生会ノート」に記されている。今回、平成3（1991）年度から令和2（2020）年度までの若葉幼稚園の「誕生会ノート」22冊を借用させて頂くことができた。

平成27（2015）年9月の関東・東北豪雨によって栃木市内にも甚大なる被害を被った。このため若葉幼稚園でも「誕生会ノート」が水に浸かり、残念ながら処分してしまったものもあるとのことだった。借用した「誕生会ノート」を開いてみると、誕生会を担当された先生方による計画と反省が手書きで詳細に記載されているのに衝撃を受けた。お借りしたノートは年度によっては欠番があるものの、22冊の「誕生会記録」の形式は、ほとんど変わっていないが、平成9（1995）年度の「誕生会ノート」から最初のページに4月から翌年3月までの子どもたちと教職員の誕生日が一覧で示されるようになった。

誕生会は、多くが4月と5月というように、2ヶ月まとめて実施されているが、誕生月

の人数が多いときは、1ヶ月分で実施していることもある。

まず、この形式であるが、月日、会場となる「なかよしの部屋」のステージの配置図、誕生児の名前（年少、年中、年長、ことり）、誕生月の教員名、係分担（司会、ピアノ、ゲーム、お菓子、ワッペン）が記載されている。さらに、当日のプログラムは、1. 入場 2. まねっこ 3. 挨拶 4. ご機嫌伺い 5. 誕生児登場 6. 誕生児紹介 7. 「おめでとう」「ありがとう」の受け答え 8. 全体の歌 9. 出し物 遊戯 10. ゲーム 11. おじい様おばあ様のご紹介 12. お眠り お家の方に挨拶 13. 退場 となっている。

歌は、ひよこ、年少、年中、年長ごとに選曲され、ゲームのタイトル、ルール、準備が記載されている。次に前述したプログラム1～13までの実施した内容の反省が詳細に記されている。

特筆すべきことは、誕生児にお祝いのプレゼントとしてお菓子などを入れて贈る月ごとの誕生袋が学年ごとにミニチュア版で作成されてノートに添付されていることだ。台紙、持ち手、折り紙などの色や素材が記載されており、実際に作成した素材で作られているのが最大の特徴であろう。それによって、どのような素材を使って製作したのか、その過程も知ることができる。これは写真では伝わらない生きた教材資料である。

最後に、園長先生、理事長先生よりコメントが記載されて、松下先生の印鑑が押印されている。朱色の美しい文字で書かれた明世先生のコメントには、常に企画した教員の労をねぎらい、講評や今後の提案がなされている。細かな点では、子どもたちの歌い方もエスカレートしないようにきれいな声で歌うことや、曲のリズムなどにも注意して歌うように言及されている時もある。

この貴重な「誕生会ノート」の詳細は、次稿で考察したいと考えている。

おわりに

筆者らは、夏期教育研修の引率や教育実習の巡回で栃木幼稚園に赴いた際に、松下明世先生から幼児教育の素晴らしさについて話を伺う機会を得てきた。そこで、長年にわたる明世先生の貴重なご経験を、保育者や教員を目指す学生たちと共に再度拝聴したいと願い、令和5（2023）年7月に、明世先生にご来学いただき、「子どもから学ぶ」という演題で、教育講演会を開催させて頂くことができた。講演会では、子どもを尊重し寄り添い見守りながら、子ども自身が考え、そして子ども同士が関わり合いながら成長していく感動的なお話を拝聴し、最後に明世先生のご指導のもと、「たなばたさま」の歌を全員で合唱した。「たなばたさま」の合唱では、歌詞を理解することから始まり、笹の葉や星空の光景を体で

表現されている明世先生のしなやかな姿がとても印象的であった。

そのような経緯もあり、明世先生の実践について、更に詳しく学びたいと思い、『夏期教育研修』に掲載されている明世先生の講話の記録を繙き、また生い立ちや学生時代の経験についてインタビューさせて頂く機会を得た。戦時中の壮絶な体験を経て、影響を受けた方々のエピソードなどを伺いながら、明世先生の根底に培われた多くの要因が明らかとなり、偉大なる姿が浮き彫りになった。

本稿では、この偉大なる明世先生の人間形成、教育実践を培った主な要因は、幼少期からの家庭環境と父吉衛先生による教育そしてアルウィン学園玉成高等保育学校での体験にあるのではないかと課題を設定し考察してきた。明世先生の人間形成、教育実践に大きな影響を与えているのは父松下吉衛先生の教育方針である。吉衛先生は「子どもから学ぶ」童心拝育の保育理念を提唱し園児一人ひとりの人格を尊重しているが、多忙な中において自らの子どもたちの人格も尊重しその健康や教育に配慮していたことが明らかとなった。明世先生は父の方針で栃木から東京に転居し、学業の傍らバレエや舞踊を学んでいる。父と共に戦前・戦中を過ごし戦後も父を尊敬して「幼稚園をやっぺいこう」と決意され、父の勧めでアルウィン学園玉成高等保育学校に入学した。そこで生涯の師と慕うアルウィン先生に出会い保育の原点を学んだのである。明世先生は父吉衛先生の童心拝育の保育理念とアルウィン先生のフレーベル主義の保育理念は同じであることを洞察し、子どもたちを愛しその成長を祈る教育愛に基づく幼稚園経営・教育実践をされている。明世先生は父吉衛先生揮毫の「拝育」の大きな額を栃木幼稚園の玄関に吉衛先生の写真と吉衛先生が95歳の時に書かれた「拝育」「げんき なかよし」の額（図12）をなかよしの部屋（ホール）に掲げ、吉衛先生の命日5月16日を「仲よしの日」と定めて栃木幼稚園並びに若葉幼稚園の記念日にしている。アルウィン先生の上半身の大きな写真は職員室に掲げられている。

「童心拝育」「創造と調和」の保育理念・保育目標は初代園長松下吉衛先生の幼稚園創設を決意させた究極の理念であるが、明世先生もこの理念を深く理解し学び受け継いでいる。「童心拝育」「創造と調和」の保育理念・保育目標は大正、昭和、平成、令和の時代を貫いている栃木幼稚園・若葉幼稚園の不変の原理であることが理解できる。本稿ではその原理を実現するための環境として栃木幼稚園の園舎の構造を考察したが、合理的構造で隔々まで幼児の成長と安全が考慮され、「おとぎの階段」など「幼児の園」にふさわしい名称がついていることに感動した。また若葉幼稚園における「誕生会ノート」を見せて頂き、誕生日は人間にとって、特に成長過程にある幼児期の子どもにとっては大切な日、喜びの日である。友達、家族、教職員、皆で祝う誕生会のために用意周到な準備がなされている。その詳細な検討は今後の課題として残され

た。なお若葉幼稚園の園舎の構造はどのようになっているのであろうか。次回の検討課題である。

本稿を結ぶに当たり生い立ちや当該幼稚園の情報公開を許可して下さった学校法人燿光学園理事長・栃木幼稚園園長松下明世先生に衷心より感謝申し上げる。

なお本稿は本学研究倫理委員会の承認を得ている。

注

- (1) 伝記編集委員会編『荒野に水は湧きて－ペラ・アルウインの生涯－』アルウィン学園 1980 年 429 頁。「この伝記は、幼時に彼女から教えを受けた幼稚園の卒園児と、彼女から保育学校で薫陶を受けた卒業生とが、思いを一つにし、祈りを一つにしてつづったものである。」(同書「はじめに」3 頁)
- (2) 松下吉衛『増補 私の求道』学童開発協会 1983 年改訂版 27 頁
- (3) 日本保育学会『日本幼児保育史 第二巻』フレーベル館 1970 年再販 223 頁
- (4) 上笙一郎・山崎朋子『日本の幼稚園』理論社 1974 年 51 頁
- (5) 伝記編集委員会編『荒野に水は湧きて－ペラ・アルウインの生涯－』アルウィン学園 1980 年 488 頁
- (6) 日本保育学会『日本幼児保育史第三巻』フレーベル館 1973 年再販 217 頁
- (7) 伝記編集委員会編『荒野に水は湧きて－ペラ・アルウインの生涯－』アルウィン学園 1980 年 280 頁
- (8) 伝記編集委員会編『荒野に水は湧きて－ペラ・アルウインの生涯－』アルウィン学園 1980 年 268 頁
- (9) 前掲書 268～269 頁。荘司雅子『フレーベルの教育学』フレーベル館 1955 年 82 頁。唐沢富太郎編著『図説教育人物事典－日本教育史の中の教育者群像』ぎょうせい 1984 年 654 頁。
- (10) フレーベル著岩崎次男訳『幼児教育論』(『世界教育学選集 68』) 明治図書 1972 年 188・217 頁
- (11) 荘司雅子『フレーベルの教育学』フレーベル館 1955 年 81 頁
- (12) 前掲書 82 頁
- (13) 伝記編集委員会編『荒野に水は湧きて－ペラ・アルウインの生涯－』アルウィン学園 1980 年 145 頁
- (14) 前掲書 148 頁
- (15) 松下吉衛の童心保育の保育理念については、小川澄江「栃木市における幼稚園教育の発展－大正期の幼稚園教育の発展」(『國學院大學栃木短期大学紀要』第 47 号 2013 年所収) を参照のこと。
- (16) 松下吉衛『父母の書』(初版は『児童を愛するの道』1936 年 2 月発行) 学童開発協会 1981 年 5 月改訂発行 262 頁
- (17) 松下吉衛は早稲田大学在学中に中桐確太郎教授から「教室でわない教え」を受けるようになり「お宅に泊めてもらった」翌朝のこと、中桐教授は学校に出かける 2 人の子どもたちに食事中でも中断して玄関に出て「行ってらっしゃい」と声をかけた。吉衛は父親が子どもに礼を尽くすこの光景に心を打たれ、深く印象に残り後年「保育という保育理念として誕生したのでわかないか」と回想している。(松下吉衛『増補 私の求道』学童開発協会 1983 年改訂版 15・16～17 頁)
- (18) 「学校法人燿光学園、栃木幼稚園・若葉幼稚園」HP
<http://www.tochigi-wakaba.ed.jp/> アクセス日 2024 年 10 月 31 日

図：栃木幼稚園の園舎、施設



図1：栃木幼稚園



図2：松下吉衛揮毫「拝育」



図3：中央の広場



図4：太陽の広場



図5：砂の広場



図6：なかよしの部屋



図7：なかよしの部屋の舞台天井



図8：ネットの森



図9：光の階段



図10：見晴らしの階段



図11：おとぎの階段



図12：松下吉衛写真、揮毫「拝育」
「げんき なかよし」